

# 「まさかに」考

—馬琴の読本を中心として—

鈴木 丹士郎

—

曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』において「まさかに（正可）」という語が第六輯卷一（文政一〇年—一八二七）あたりから現れるようになる。

かう数回あまたたび狐疑こぎしつ、やうやくに進み入りて、又張うかやふこと半响はんときばかり、疲勞つかれて実まことに熟睡うまみしたり、とまさかに思おもひ決きめけん。忽たちまち地直躬すつくと立たつより速すみく、晃きらりと抜ぬける刃やいばの雷母いなづま、軻かやの釣緒つりをを断落きりおとしつ、（六輯五二回）

船虫ふなむしが背そびらに写かれし文字もんじに扱よりて、木天蓼丸わた、びまるの盜賊たうぞく正可まさかに知られしかば、箆まひら大刀おほと自じの疑うたがひ解とけて（九輯一一九回）

前者の例は、「熟睡し」たと「まさかに」「思ひ決め」るに至つたのは「やうやくに進み入りて、又張ふこと半响ばかり」の状況判断からであり、後者の例は、「盜賊」と「正可に」「知られ」たのは「船虫が背に写れし文字」という動かしがたい事実に基づいている。

ここに用いられている「まさかに」は、その事がどの点から見ても、また有力な根拠によってそうとしか判断できないという意を表す語と考えられる。

また、刊行年時が『南総里見八犬伝』に連続する『近世説美少年録』の後半部に当たる『新局玉石童子訓』にも「まさかに（正可）」がみとめられる。

毒殺の事、巨椽の事は只我々が推量のみ、正可に聞たる事ならぬに（一七・四七回）

この例は、そういう事実の判断を（正可に）他の人びとに聞いた上でくださったわけでなく、自分達の推量だけに基づいておこなったということ。

原来自盗る者ありけん、と思ひとりつ、堪能なる周易者流に占問ひしに、正可に我が所為なりと報るによりて（二五・五五回）

こちらの例は、上手な易者に占ってもらったところ「正可に」お前のしわざだと告げるのでということ。

これらの「まさかに」も『南総里見八犬伝』の用法と同じである。両作品全体にわたっての「まさかに」についてはあとでさらにくわしく述べることにし、「まさかに」がどのような変化をしながら現代語に受け継がれたのか、あるいは受け継がれなくなったのか、その点をまず検討し、次に「まさかに」について歴史的展開を見、その上で馬琴の読本に見られる「まさかに」がどのような性格を有するのかを考えてゆきたい。

## 二

現代語を中心的に扱っている小型国語辞典の類を見ると「まさかに」を見出し（子見出しにも）に立てているものはないようである。日本語において現代語の範囲をどう捉えるかにかかわるが、二〇世紀後半以降今日に至るま

でとする狭義の現代語では「まさかに」はほとんど用いられないように思われる（一九三八年生まれの筆者は使用しない）。

『新潮現代国語辞典』（第二版二〇〇〇年二月発行新潮社）は、明治初年から現代までの「著名な言語作品から実用例を求め」（序）て掲げてあるところに特色がある。見出しは「まさか」で立ててあるものの、内田魯庵の『くれの廿八日』（明治三一年—一八九八）の「开（）んな筋道の違つた事は—（正可）に遊ばすまい」、永井荷風の『あめりか物語』（明治四一年—一九〇八）の「—に逃げ隠れも出来ないの」のように具体的用例から「まさかに」が使われていることがわかる。

小型国語辞典でも「まさか」という見出しなら立項してあり、しかも副詞の品詞標示をしているものが多い。一、二の例を示すと左のようである。

岩波国語辞典（第六版二〇〇〇年・十一月発行岩波書店）【副】〈普通はあとに（推量的）打消しを伴って〉①そんなことはあり得ない、またはとてもできない（だろう）という気持を表す語。よもや。いくら何でも。「—君ではないだろうね」「—恩知らずとも言えないし……」▽名詞的に使うこともある。「—の時（予期しない、急な時。万一の場合）」「—に備えて」。また意外な事を告げられた時の返事などに、単独にも使う。(2)の転。②（ありそうもないことが）本当に。「—にそうだとも知らず」

新明解国語辞典（第六版二〇〇五年・一月発行三省堂）

（副）「まさ」は、「まさしく・まさに」の語根と同義。「か」は接辞「あるはずがないと確信している事が、意外にも実現した場合を想定する（して信じられないことだと思う）様子。「感動詞的にも用いられる」「—あの人が裏切るなんて思いもしなかった／—、そんなことはないだろう」（筆者注：「まさかの時」は子見出しとして採

類語大辞典(二〇〇二年・一月発行 講談社)

(否定または否定的な意味の語をとまなつて) ①ある事態について、それと反対の事態のほうが可能性が高いということとは、どんな仮定をしてもまずあり得ないだろうという話し手の判断を表す言い方。「計画が途中でだめになるとはね、本当に驚いた」「あの人が盗みでつかまるなんて(考えられない)」②ある事態が望ましいと思つても、そうできる可能性は、どんな仮定をしてもまずあり得ないだろうという話し手の判断を表す言い方。「いくら暑いからといつて、町を裸で歩くわけにはいかない」「先生のおかげから来てくださいとも言えなかつた」(筆者注:「まさか」が二箇所にあけてあるが、(4111)「叫び」の「聖訓」の方をあげた。「類語を意味と品詞によつて分類した上で、それぞれの語について意味をくわしく分析し、原則としてフルセンテンスの用例を添えた」(この辞典を世に送り出すにあつて)とあることから、狭義の現代語の「まさか」を見るに適切であろうと考え、この辞典から引用した。なお、体裁は横組みである)。

以上、取りあげた小型国語辞典の類には「まさかに」についての説明は見られず、このことから今日における「まさかに」がどういう位置にあるかをほぼうかがうことができる。

### 三

「まさか」は「まさかに」「まさしく」などと同一語基である「まさ」に接辞「か」が付いてできた語と考えられる。「まさかに」はこの「まさか」に助詞「に」が結合した語であるので「まさかに」の語史をたどるにあつても「まさか」と関連づけておこなうべきであろう。これまで明らかにされている事実を参考にし、さらに筆者の手控えの

用例カードなどを基に「まさか」「まさかに」の用法を見てゆくことにしたい。

「まさか」は、現在という時点、今、の意の体言（名詞）として最初用いられ、その用法を引き継ぐ一方、これから変化した、ある事態の実現が今に迫っている、意では「まさかの時」「まさかに備えて」などの言い方に体言の用法を残しつつ、「まさか」は次第に副詞用法に傾いていった。そして副詞用法としての「まさか」は、そんなことはあるはずがない、という意味の方向と、あるはずがないと思つたことが実際に（本当に）ある、という意味の方向とを獲得してゆくようになる。「まさか」を強調しようとしたのが「まさかに」であろうが、この「まさかに」にも「まさか」に添い伴つて異なつた二方向の意味がみとめられる。

まず、最初の用法の方から見てゆくことにする。

一 否定や反語の言い方を伴つて、そういう事態の実現がありそうもない、ある事の実現が不可能であるという気持ちを表す、場合。

「まさか」

見たか、身が切口。是でなければまさか人は斬れぬ（幼稚子敵討・二宝曆三―一七五三）

古道少人行 客があつた事がないからふるくよくれたた、みへやけ酒もぬすんでのむくせにそこらぢうへこほれてゐる一足もふむとたびがた、みへくつついてうごかぬほどなりたんぼのへんなればこじぎが下駄はかすところなれどもまさかそふもならぬ（蕩子筌枉解明和七年―一七七〇）

なんてもきれよふとおもふがこれといふてつせうもねへからいろくとなんだいをいふけれどなんのかのとまさかはなさねへ（契情買言告鳥寛政二年―一八〇〇）

それもまさか直にも聞にくいから。唐まつさんに其返事を聞てもらをふとおもつてさ（起承転合後篇遊治郎・

二章享和二年——一八〇二)

後の問ひ吊ひはして遣るから、心を残さず往生しろとか云ふ仕打もあらうけれど、万一夫ら程のことでもあるめえ(契情肝粒志・四篇中文政一〇年——一八二七)

こゝろのねへでもねへが、まさかそんなにしたくもないのさ(春色恵の花・初編一天保七年——一八三六)  
まさか左様した理屈もあるめへ(七偏人・五編上安政四年——一八五七)文久三年——一八六三)

MASAKA, マサカ, 正敷, *adv.* …… (略)

(2). with a negative verb, = not likely, improbable. *Masaka sono yō na koto shinaz mai*, it is not probable that he did such a thing. *Masaka sō demo arumai*. I think it is very unlikely. Syn. YOMOYA (J・C・ポ) 和英

語林集成初版慶応三年——一八六七 いま一つの用法の説明については用法二で触れる)

まさか命にかゝはる事を、馬鹿でないから被成まい(島衛月白浪・式幕明治一四年——一八八二)

一旦約束をしたからは、まさか来ねへ事は有るめへ(同・五幕)

如何ニ誤解ニ巧ミナル西村君ト雖ドモ真逆此論理ヲ指シテソハ間違ナリト得謂ハザル可シ(馬場辰猪患者ガ決心ヲ求ムル時ハ医師立会ノ上之ニ応ズルベシトノ明文ヲ法律ニ掲グルノ可否明治一五年一〇月一二月——一八八二「国友雜誌」第五三・五四号)

お茶ツびい連も一人去り二人去して残少なになるにつけ、お勢も何となく我宿恋しく成つたなれど、正可さうとも言ひ難ねたか漢学は荒方出来たと拵らへて退塾して(二葉亭四迷浮雲・一編二回明治二〇〇二二年)

……と心附いて起ち上りてはみたが、正可跡を慕ツて往かれもせず(同 三編一五回)

僕なんぞ……豈か天才とまでは自惚れも為なかつたけれど（小栗風葉青春・秋之巻五明治三八〜三九年）  
 一二杯のビールで豈か後の躰に障りも為まいし（同 秋之巻八）

旦那も何だけれど、妹の奴、食はして貰つて居て、そんな事をしやがるかと思ふと、まさか本気でもなかつたが、私は出刃庖刀を振廻してやつた（暗夜行路、後篇三・六大正一〇年—一九二一—昭和二一—一九三七）

〔まさかに〕

今更その様ナはたらきのネへ言訳もまさかにしにく、（三二筋道宵之程、弐・夏のだん寛政二年—一八〇〇）

由「マア茶漬を一膳くはふぢやアねへか」ト懐中より玉子の王子焼をいたす（王子はじのまるをいふ）

小「ヲヤい、ものだネ」由「まさかにそれで酒をとお角さんにははれもしねへから」（風俗吾妻男、三編下・五

回天保六年—一八三五）

溜息をつくその中にまんざらでもなき恋の情、自然と知れて半次郎が心のうちに悦べど、まさかに手出しもならざれば、言葉途ぎれてさし向ひ（春色恵の花・初編二）

夜がふけるからはやく寐なせへ。調度二三日止宿客があつて夜着蒲団も借て置たから、まさかに風邪もひか

せなひ（春色梅美婦禰・三編九天保二年—一八四一—三年）

イエナニまさかに宿なしともうす程でもござるませんが、当分は先ツ心易い者の方に居候を致して居りますから（いろは文庫・一一編六四回天保七年—一八三六—明治五年—一八七二）

そんな田舎者を噂アにする事は厭と思へど、まさかに厭とも言兼て（教草女房形氣・二一編上弘化三年—一八四六—明治元年—一八六八）

清吉もまさかに隠立もならざれば、斯様々々云々なりと語りければ（同 二四編下）

「まさかにかい」

真処ニ孔孟程ノ人が左様ナ蔽ハアリソモナイ事デゴザルガ（百一新論・上明治七年—一八七四）

小説伝奇の類ハ世道人心に害ありと申せども、政かに善を懲し悪を勸むる趣意にも非らず（福地桜痴「日本文學の不振を嘆ず」東京日日新聞明治八年四月二六日）

犬飼うてまさかに猫も捨られず 富水（俳諧開化集明治一四年—一八八二）

乙女さんが只今の身分なればこそ立派の所にも出られませんが、女役者になつて御覧じろ、真逆に芸人が上等の附合に入る事ハ出来ませんよ（もしや草紙・三七回明治二一年）

大方権一郎の事は内々聴く積りで来たのだからが、豈かに私の前でハ頭にも問難ねて、夫れで躊躇して居たのだから（縁簞談・続五回明治二一年）

是非結て進けてお呉れ、と内儀様のお頼。お得意の事ではあり、真逆に勝手な事も出来ず、島田が一つに丸齧を二つ、厭々結て参りました（北田薄氷乳母（一）明治二九年—一八九六）

それが濃でないと為れば、愛して居らんと考へるより外は無い。豈に彼人が愛して居らんとは考へられん（金色夜叉・前編六章明治三〇—三五年）

正可に功名心の為めと初手から意識なすつたわけぢやアなくて、能くいふ魔がさしたんでせう（ぐれの廿八日・五）

若い女ばかり集る所だからお秀の性質でもまさかに寝衣同様の衣服は着てゆかれず（国木田独歩二少女・下



明治三年)

自分でも体の衰弱は承知<sup>し</sup>為<sup>し</sup>て居たのであるが、豈<sup>まさ</sup>かに憊<sup>か</sup>うまでとは思はなかつたので(青春・秋之巻四)  
町の人々は山の大きな岩を売つた処で真逆<sup>まさか</sup>に持つては行かれまいと、承知<sup>まさか</sup>をすると(暗夜行路、前篇二・二)

#### 四

二 そうであることをはっきりと確認して肯定したり、そういう事態・状況であるのが間違いないと判断したりする様子を表す、場合。

について見てゆくことにする。

〔まよひか〕

森羅万象かんで含<sup>く</sup>るやうに出来てあれど、まさか覚<sup>おぼ</sup>えようといふ心のものが少い(古朽木・一安永九年—一七八〇)

なぜだねいなせかあはぬと心ほそくさびしひやうてゐてまさかあへはたくさんそうに足のちかひをゐけんして(部屋三味線寛政年中一七八九—一八〇〇)

道のない人といふものは、常は人並の様なれど、まさか困窮するか行詰つたとき、どの様なこと仕出さうもしれぬ(松翁道話・五篇中文化二一年—一八二四—弘化三年—一八四六)

くびれて死ねと細<sup>ほ</sup>びきまでそへていとまをゆるされても、まさかほかなきしかばねを見られて恥<sup>は</sup>をさらさんよ<sup>り</sup>、あの水底<sup>みそと</sup>に身をしづめんと河原<sup>かはら</sup>をさしていそぐほどに(素糸草紙・下文政二二年—一八二九)

MASAKA, マサカ, 正敷, *ada*. Just at the time when any thing is about to take place, as, *Masaka kassen ni naruto okobiyogami ga tsuku*, just as the battle was about to commence he was seized with cowardice. *Masaka sono ba ni naru to sō mo naru mai*, when it came to the point I could not do it. *Masaka no toki*, the critical time, *juncture*. (2).……(略) (和英語林集成初版)

トハ思つてゐるやうなものゝ、まさか影口が耳に入ると厭なものサ(浮雲・一編三回)

【キヤウカ】

何から先へいゝださんと思ふ恨もまさかにもお顔を見てはみすばらしくむかしにかわるおすかたと思へは慥氣もどこへやら(三二筋道宵之程、巻・冬のだん)

其の時なれば私も、一閃に斯うと思ひしが、まさかに此処へ来て、お前さんのお顔を見れば、男の立と立たぬ訳を、他所事に聞きませう(柳の二葉・下七文政六年——一八二三)

まさかに年中彼通ならば、塩谷家で奉公も勤まる道理はないはずだけれど(いろは文庫・三編一五回)

私の顔を立ておくれでなひと男が立ねへわけだが、まさかに艶しい氣質のお前だから、サアと言た節何処迄も言情を立通す心かへ(英対暖語・二編一〇章天保九年——一八三八)

貴方のやうに高等教育を受けて世の中へ出たての人は兎角雷獸輩が食物にしたがるものですから、其辺はよく御注意なさらないと不可ません。僕だつて教育こそないが、借金を踏んぢや善くない位の事はまさかに心得てゐます(彼岸過迄・風呂の後一二大正元年——一九二二)

以上、見てきたように「まさか」が副詞用法として用いられるようになったのは江戸時代からである。多くの用例が洒落本や人情本等にみとめられるところから江戸時代でも後期から優勢になり、明治期に入っても多く用いられた。「まさかに」の方も「まさか」と同じ傾向を示しながらも、用法二は用法一に比べて用いられることが少ないようである。この傾向は特に現代語においていちじるしいように思われる。用例にあげた漱石の『彼岸過迄』の「まさかに」について、平成四年（一九九四）六月発行の漱石全集（岩波書店）を見ると注解が付されており、「疑いもなく。本当に。」とある。注解に取り上げられる背景には既に述べたように「まさかに」という語そのものがあるいは「まさかに」の二の用法が今日用いられなくなっていることを物語っていると考えられる。

## 五

ここで、再び馬琴の『南総里見八犬伝』『近世説美少年録』（新局玉石童子訓）にみとめられる「まさかに」について見ることにする。両作品合わせて五〇例弱（南総里見八犬伝三八例、近世説美少年録一例、新局玉石童子訓八例）の用例が見られるが、まず「まさかに」がどのような意味分野の語にかかるかを見てみよう。

(1) 〈見ゆ 見る 認む 目撃す／示す 拜む 顕はる〉など、視覚に関する語にかかる場合。

那細糾かのほそまきの麻索あさなほに堤燈てうたひとほり一張結着て、窖あなの底まで線降くわおろすに、深六七尺かみせきに過すざれば、亡骸正可なきがたまさかに見えてけり（南総里見八犬伝・八輯七五回、以下引用は八犬伝と略称する）

真白ましろの衣きぬを被下きくだしたるが、長き黒髪くろかみを振乱かりだして、浜路姫はまぢひめの寝所ねやの辺ほとりに、立顕たちあらはれたりけるを、正可まさかに見きとい

ふ者多かり（八犬伝・九輯一〇九回）

正可まさかに往方ゆくへを見給みたまはずは、猶御疑なほおんうたがひを遺のこすに似たり。這虎筆下このとらひつかの墨迹ぼくせきなれども、既に是状これかたちあり（八犬伝・九輯一五〇回）

老臣ら們を召聚めしじよ合へて、評議こうぎを凝こらさせ給たまへども、正可まさかに認めし敵せいでうならねば、いまだ征伐せいばつの義ぎには及およばず（八犬伝・九輯一〇二回）

只初世しよせの八犬士はつけんしは其終そのをまりつまひら、詳まならず。皆地仙ちせんに倣なりて、富山とやまに在ありといふのみ、正可まさかに目撃めくつせし者ものなし（八犬伝・九輯一八〇勝回下編）

はやく荏土えどへ赴おもむきて孝嗣きやくすいを救すくふべし、と正可まさかに示しめさせ給たまふとおもへば、忽然こちなんとして夢さめは覺さにき（八犬伝・九輯一五五回）

この折神女かほはせのおん顔かほの、正可まさかに拝おがまひしかは（八犬伝・九輯一一四回）

是こゝによりて南弥六なんみやろくが、義俠ぎけつの心術しんじゆつ正可まさかに顕あらはれ（八犬伝・九輯一一五回）

(2) (聞(聴)く) という聴覚きこに関する語ことばにかかる場合。

やをれ臆おく恥ぢ見み、正可まさかに聞きけ（八犬伝・九輯一五一回）

やややその男子おとこ、正可まさかに聴きね。魚丸君うまはな上にいます。汝速いましすに首伏はくでふせば、命乞いのちこひして得えさすべし（新局玉石童子訓、二八・五八回）

二八・五八回）

這秘事このあごとは守実もりまも、いまだ知らしらでぞあらむずらん。健宗たけむねも正可まさかに聴きね（新局玉石童子訓、二八・五八回）

(3) 存在そんざいの認識にんしきや内容りやう・情況けいけいの把握はくわくなどを表あらわす（知る）という語ことばにかかる場合。

銚なして見みずはいかにして、虚実まぼろしを正可まさかに知しるよしあるべき。況刃まての鋭味きれあの、世よに捷すれしを目前まへあたりに（八犬伝・

八輯八〇回）

事の暗合是も亦、自然に出て輪の出所を、今正可に知る娛しきよ（八犬伝・九輯一八〇回上）

汝等が身に在る所の、形状牡丹に似たりし痣子の、皆銷耗しを正可に知りぬ（八犬伝・九輯一八〇勝回中編）

此彼共に腰刀さへ、旧の主さへ正可に知られて、出処分明ならんには贓物たること疑ひなし（八犬伝・八輯七八回）

嚮に他が喪ひたる沙金と唐布を買せんとて、金二百両を齎して京師へ遣したりといふ、其事正可に知れたり

（新局玉石童子訓、二下冊・三四回）

(4) そのように心に捉える、記憶にとどめるなどを表す（思ふ 覚ゆ）という語にかかる場合。

那敵の間諜児が必其浦辺に在んとは、正可に思ひ得ざれども、謀る所暗合して毫も錯ざりけるは、凡智のよく做す所ならんや（八犬伝・九輯一五九回）

奇事記にもやありつらん、今は正可に覚ねども、洛陽橋なる石の偶人、夜々化て小児に做りて人に戯れしこ  
と見えたり（新局玉石童子訓、三〇・六〇回）

(5) 言葉で表したり、物事のよしあしの判断を求めるなどを表す（言ふ 告ぐ 訴ふ）という語にかかる場合。

這衣箱を主人の東西と、正可にいへる證據やある（八犬伝・八輯八三回）

彼等は朝倉の問者にて、当国の強弱を擲るべき為也、と正可に告る者あれば（新局玉石童子訓、一七・四七

回）  
若は襖に次団太を、木天蓼丸の盜賊也とて正可に訴稟ししに、次団太は那盜賊ならず（八犬伝・九輯一一八

(6) そうである、そうでないという確信に満ちた判断を表す（助動詞「なり」）にかかるといふ場合。

いと朽をしくも見ることの、今さら自由ならざれば、正可にふとはいひがたけれども、那奴が声は武蔵にて、鷗尻の並四郎と喚做したる、奸賊の妻なりし船虫に似たる所あり（八犬伝・八輯七六回、判断辭が潜在している場合）

こは徧小なる路傍矮堂也。嚮にこの処を過りし折、心ともなく見しは正可に是なるべし（八犬伝・九輯一二七回）

(7)その他

今朝又おん身の手に入りし、艶翰は文字の消耗て、紙のみ正可に残れるは（八犬伝・九輯一一四回）  
只心許なきは、那妖尼の往方也。正可に我靈玉の光に撲れたりければ、走り果べうは思はねども、這頭に見

えぬは又奇也（八犬伝・九輯一二二回）

汝帰路に立ち寄りて、その代四郎に這扇子を正可に通与しね。憑むぞよ（八犬伝・九輯一四四回）

既に若們を認るものから、那時正可に面を対してもいひしことあらず（八犬伝・九輯一四六回）

和殿那暴虎を正可に対治し給ひし歟、と問ふに（八犬伝・九輯一四七回）

以上のように馬琴の読本に見られる「まさかに」(1) (7) は、二の用法、すなわちどのような点から見てもそうとしか判断できない、という意で用いられていることがわかる。その点では、

はつきり（と） 明らかに 明白に 本当に

確実に 実際に 間違いなく

などの語と似た意味で用いられている。文脈によつては例えば(2)の「きく（聞、聴）」の命令形の場合などは「しつかり（と） しかと（聴） ちゃんと よく」などの語に似寄りが感じられもする。これは「まさかに」が多義に

わたるといふのではなく、命令形にかかる時の含意というこの語の運用の面にかかわるためであつて基本義は二で規定したとおりである。

二の用法そのものは「まさか」を含めて、江戸時代の洒落本・人情本等に見られるものの用例は多くなく、「まさか」「まさかに」が一、すなわち否定とか反語とか一定の言い方を要求して、どう考えてもありえないという推測を強めていう用法（陳述副詞）が主流になつていた状況から考えて馬琴の用いる「まさかに」はやはり特徴的である。馬琴の場合の「まさかに」は二の用法と連続しているようにも見えるが、じつは古語らしさを意図して、語形と意味の類似する「まさしく」「まささに」「さだか」などの語を応用して作られたのではないかと思われる。

## 六

次に、今まで述べた以外の「まさかに」について触れることにする。

この蓋世の大丈夫、南総八犬随一人里見氏股肱の俊傑と、いほでも知るき面魂、坡堤の芒花霜に枯れて、招くともなき寒風は馬の辺を避て吹く、威風正可に凜然たり（八犬伝・九輯一六五回）

この「まさかに（正可）」は、八犬士の一人犬飼現八の風姿の形容に用いられている。馬琴の「まさかに」は(1) (7)で見たように動詞、しかも多くは感覚に関する言い方にかかる場合である。この例は物事の性質や状態を表すタリ活用形容動詞の「凜然たり」を修飾しているのであろうか。

これは「威風」（が）「正可に」（＝威風堂々としていて）で、しかも「凜然たり」（＝りりしく勇ましい）となる文脈構成であると考え、形容動詞「まさかなり」の連用形として「まさかに」は述語の資格に立つと見るのである。ナリ活用形容動詞の連用形「―に」は動詞に対して副詞と同じ連用修飾の働きをするから、この場合は副詞「まさ

かに」から形容動詞「まさかなり」の連用形が想起され、「まさかなり」の連用形としての「まさかに」が中止法に用いられたものである。

這大石忽地中より両箇に裂て、左右へ開くこと三尺許、奥は正可に虚にて、山洞の像く見えしかば（八犬伝・九輯一二一回）

とある例も前の「まさかに」と似ているようであるが、これは(6)の、助動詞「なり」にかかる場合と考えてよい。

次の「まさかに」はどう考えたらよいであろうか。

声を合して、喃々と呼活ること半响許、其声やうやく耳に入りけん、五足齋は忽然と眼を睜り左見右見て、  
 原來俺身は死したりし歎といふに、老苧は欲しさに携り附つ、喃我佚、心地正可に做り給ひし歎（新局玉石童子訓、一三・四三回）

この「正可に」は、現代語で「まさかに備えて」と同じであつて、名詞「まさか」に助詞「に」の付いた形である。しかも、この「まさか」は正常な意識、正気の、意で、氣を失っていた状態から意識を取り戻した状態になったのが「正可に」做り（動詞）である。次の例もこれとまったく同様である。

やよや長橋象船主、心地正可になりたる歎（新局玉石童子訓、一七・四七回）

「まさか」に新たな意味が与えられるようになったが、それはどのような理由に拠るのであろうか。馬琴の「まさか」「まさかに」の漢字表記がほとんど「正可」であることを一つの可能性として考えてよいかもしれない。

なお、「まさか」「まさかに」の漢字表記（熟字）については別に述べることにする。



## 注

- (1) 筆者はかつて授業で、この狭義の現代語を「今日語」と称して、広義の現代語と区別して用いたことがある。
- (2) 昭和三十一年（一九五六）発行の漱石全集（岩波書店）では「まさかに」に既に注解がほどこされている。それには「普通は『に』を附けて使わない言葉である。いくらなんでも。よもや。」とある。さらに古川久編『夏目漱石辞典』（昭和五七年一月発行、東京堂出版）でも「まさかに」が採録されており、「いくらなんでも。どうしたって。」の語釈をし、この例を引いている。両者と平成四年発行の漱石全集とは「まさかに」の語釈に相違がある。